

新刊 インタビュー

BNPパリバ証券
経済調査本部長・チーフエコノミスト

河野龍太郎



『成長の臨界』

「飽和資本主義」はどこへ向かうのか』

(慶應義塾大学出版会 548頁)
2,750円 (税込)

表紙に大きなお腹を抱えたカエルの絵があります。本書との関係は？

「カエルと牛」というイソップ童話があります。初めて牛を見た子がカエルの話を聞き、母カエルが「こんな大きさかい」とお腹を膨らませ、最後には破裂する、というお話です。この寓話が、日本の公的債務や日銀のバランスシート、地球温暖化問題などを投影していると考えました。「臨界」というのは「限界」のことです。

本書の内容をもう少し解説ください。

テーマは日本経済論ですが、経済・金融のアプロ

- 第1章 第三次グローバリゼーションの光と影
 - 1 ホワイトカラーのオフショアリングが始まったのか
 - 2 権威主義的資本主義 vs リベラル能力資本主義
 - 3 ICT革命と際限のない人類の欲望の行方
- 第2章 分配の歪みもたらす低成長と低金利
 - 1 債務頼みの景気回復が招く自然利子率の低下
 - 2 常態化する「資本収益率>成長率>市場金利」の帰結
 - 3 経済成長と社会包摂の両立
 - 4 テクノロジー封建主義の打破
- 第3章 日本の長期停滞の真因
 - 1 「失われたX年」はいつまで続くのか
 - 2 過度な海外経済依存が招く内需停滞
 - 3 日本型雇用システムの陥路
 - 4 日本人は2010年代に豊かになったのか
- 第4章 イノベーションと生産性のジレンマ
 - 1 景気回復の長期化と生産性上昇の相剋
 - 2 日本企業のイノベーションが乏しいのはなぜか
 - 3 消費者余剰と生産性の相剋
 - 4 グリーンイノベーションの極限
- 補 外国人労働と経済安全保障
- 第5章 超低金利政策・再考
 - 1 「デフレ均衡」崩壊までの距離
 - 2 漂流する日銀の金融政策
 - 3 公的債務管理に組み込まれる中央銀行
 - 4 円高回避の光と影
- 第6章 公的債務の政治経済学
 - 1 財政政策の復活と進行するMMTの二つの実験
 - 2 超長期財政健全化プランの構想
 - 3 人類の進化と共感
- 第7章 「一強基軸通貨」ドル体制のゆらぎ——国際通貨覇権の攻防
 - 1 金融イノベーションの帰結
 - 2 ドル一強とその限界
 - 3 「トッキディアスの罠」を避けられるのか
- 終章 よりよき社会をめざして
 - 1 豊かだが貧しい社会
 - 2 成長の臨界
 - 3 コミュニティ再生のためのヒント
 - 4 多面的にアプローチする視点を持つ

ーチに、グローバルな視点、歴史的・政治的な視点を加えました。

日本経済の30年間の停滞は、90年代後半からの第二次グローバリゼーションや第二次機械時代にも原因があります。ITデジタル技術がサプライチェーンの細分化や生産工程の海外移転を可能とし、収益性の高い大企業の事業所が消えました。代わりに高い賃金を支払う仕事は生まれず、労働市場は二極化し、セーフティネットを欠く非正規雇用が増え、長期停滞を強固にしました。

日本は長年、ドルに翻弄されてきました。人民元やユーロの台頭で、ドルの地位が揺らいだと言われ

ますが、安全資産を供給できない新興国のドル需要は旺盛で、ドルの基軸通貨性はむしろ高まっています。一方、新冷戦やウクライナ危機を受け、中国がドルシステムに安住することは最早ありません。国際金融システムの未来を探るべく、ドル基軸通貨体制を歴史的に掘り下げています。また、現在の円安問題にも踏み込んだ分析をしています。

各章ごとに歴史的視点を盛り込んでいるとお聞きしました。

19世紀初頭からの「成長の時代」の背景には、先んじて始まった第一次機械時代や第一次グローバリゼーション時代があります。90年代後半以降、第二次機械時代と第二次グローバリゼーションが訪れると、日本は転落し、中国の大復活劇が始まりました。

今回、AIやロボティクスで無人工場が可能になったところに米中新冷戦が始まり、リモート技術が普及し始めたところにコロナ禍が襲来しました。製造業のリショアリングと共に、先進国のホワイトカラー業務を人件費の安い新興国のホワイトカラーで代替する第三次グローバリゼーションが始まった可能性があります。また、現代は、250年前からの化石燃料文明社会が臨界に達し、脱物質化社会に向かう助走期と位置付けています。

政治的視点についても解説ください。

古代ギリシャの時代から、経済格差は貧者の過剰債務を招き、市民の債務奴隷転落によって民主主義の存続を危ぶませました。アテナイの政治改革は格差対策でもありますが、それは現代の先進国だけでなく、権威主義的資本主義体制の中国でも最重要課題です。

現在のリベラル民主主義体制は、19世紀の成長の時代に始まり、20世紀の戦間期に完成しました。成長の時代では、政治がその果実を再分配することで社会が安定しましたが、低成長時代は、分配する果実が縮小し、政治体制が脆弱化します。経済学は世代を跨ぐ問題を苦手とするので、政治学や社会学、認知心理学、生物進化学などの知見も援用し、解決策を探っています。

第二次グローバリゼーションは、先進国の中間層を瓦解させ、その国内政治を不安定にすると同時に、中国の躍進をもたらす、国際政治も不安定化させて



河野龍太郎氏

Photo by Kazutoshi Sumitomo

います。中国は米国に挑み、ロシアのウクライナ侵攻もあって、リベラルな国際秩序は崩壊しました。覇権国と擡頭国の軋轢がどのような帰結をもたらすのか、歴史的観点から論じるとともに、日本への影響も展望しています。

日本の財政、金融政策については、どのような分析が行われていますか。

成長の時代につくられた中央銀行制度は、低成長の時代にはうまく機能しなくなります。達成困難な目標を掲げ超低金利を固定化することが、財政規律の弛緩を含め、資源配分や所得分配を歪め、潜在成長率を低迷させている、というのが私の仮説です。日銀の金融政策は事実上、公的債務管理に組み込まれ、経済と物価の安定のためにも、長期金利の安定が不可欠となりました。制約の大きい中での出口についても分析しています。公的債務の持続性は、最新の経済理論を基に分析しましたが、極力数式を使わず平易な説明につとめました。

500ページを超える大作ですね。

コロナの影響で、ほぼ毎月行っていた海外出張がストップしたため、週末に執筆することができました。大部ですが、できるだけ読みやすくするため、物語風の歴史的分析を加えています。多くの皆様にお読みいただければ幸いです。

(聞き手：編集部)